

2018年9月20日／浪宏友ビジネス縁起観塾

喜びと苦しみ

1. 概要

(1) 資料

増谷文雄著『阿含經典1』（ちくま学芸文庫）／人間の分析（五蘊）に関する經典群／蘊相應／20味い(1)、『阿含經典2』／人間の感官（六処）に関する經典群／六処相應／9正覚によりて(1)、10正覚によりて(2)

庭野日敬著『法華三部經 各品のあらましと要点』佼成出版社

(2) 主題

人間の味わう喜びと苦しみについて、学んでみたいと思います。

(3) 学習の方針

今回の資料とさせていただく三つの経文は、扱われている話題が別々です。

経文「味い(1)」 : 五蘊（色・受・想・行・識）

経文「正覚によりて(1)」 : 内の六処（眼・耳・鼻・舌・身・意）

経文「正覚によりて(2)」 : 外の六処（色・声・香・味・触・法）

しかし、説かれていることは、まったく同じであると見ることができます。

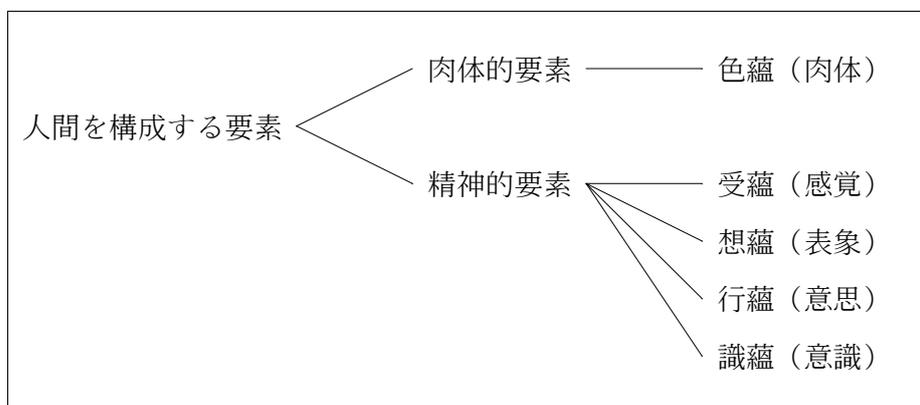
そこで、経文「味い(1)」を中心とし、経文「正覚によりて(1)、(2)」を参照しながら、学んでいきたいと思っています。

2. 五蘊

「蘊(うん)」は、仏教では、「人間を構成する要素」という意味です。

要素が五つあるので「五蘊」と呼ばれます。

人間を構成する要素は、次のように考えられています。



3. 六処

(1) 六処

「処(しょ)」は「場処」という意味で、ここでは人間が物事を認識する場所のことです。認識する場所を「内の六処」と言い、認識される対象を「外の六処」と言っています。

「内の六処」と「外の六処」が接触して、六つの認識(六識)が生じるとされています。

内の六処 (感官と心)		外の六処 (感官と心の対象)		六識
感官	眼根(視覚)	感官の対象	色境(視覚の対象)	眼識(眼による認識)
	耳根(聴覚)		声境(聴覚の対象)	耳識(耳による認識)
	鼻根(嗅覚)		香境(嗅覚の対象)	鼻識(鼻による認識)
	舌根(味覚)		味境(味覚の対象)	舌識(舌による認識)
	身根(触覚)		触境(触覚の対象)	身識(身による認識)
心	意根	心の対象	法境(心に思い描くこと)	意識(心による認識)

(2) 一切

仏教では「ものごとのすべて」を「一切」と言います。

「内の六処」と「外の六処」が、「一切である」と説く経文があります。「自分の感官と心で認識できるものごとが、自分のものごとのすべてである」ということです。

2. 味い・禍い・脱出する道

(1) 経文「味い(1)」

かようにわたしは聞いた。

ある時、世尊は、サーヴァアッティ(舎衛城)のジェータ(祇陀)林なるアナータピンディカ(給孤独)の園にましました。

その時、世尊は、比丘たちに告げて仰せられた。

「比丘たちよ。わたしは、以前、まだ求道者にして、正覚を実現しなかったころ、かように考えた。いったい、色(肉体)の味いとは何であるか、なにがその禍いであるか、また、それから脱出する道はどうであるか。

いったい、受(感覚)の味いとは……、想(表象)の味いとは……、行(意志)の味いとは……、識(意識)の味いとは何であるか、なにがその禍いであるか。そして、それから脱出する道はどうなのか、と」(増谷文雄編訳『阿含経典1』ちくま学芸文庫、p422~423)

(2) 正覚以前の釈迦牟尼世尊

- ① ここに「わたしは、以前、まだ求道者にして、正覚を実現しなかったころ、かように考えた」とあります。

経文「正覚によりて(1)、(2)」にも、同じような表現があります。

- ② 古代インドで、釈迦族の王子として生まれたゴータマ・シッダールタは、両親や周囲から大切にされ、なに不自由のない暮らしをしていましたが、人間の苦しみについて思い悩んでいました。しかし、快樂を続けていても苦しみは無くなりません。

ゴータマ・シッダールタは、出家して苦行に入りました。そして、これ以上はないというほどの苦行を繰り返しました。しかし、いくら苦行を繰り返しても、人間の苦しみは無くなりませんでした。

- ③ ゴータマ・シッダールタは、苦行をやめて、中道の修行に入りました。

断食をやめて食事を摂り、河に入って汚れを洗い流し、大樹のもとで瞑想に入りました。

数々の重大なことがらについて、設問し、思索し、明らかにしていきました。その中心課題が「味い、禍い、脱出する道」でした。

そして、ついに「ブッダ」となったのです。「ブッダ」とは、古代インドの言葉で、「正覚を得た人」という意味です。

- ④ これについて、庭野日敬師は、次のように述べています。

「釈尊は、『この世界とはどんなものか、人間とはどんなものか、だから、人間はこの世にどう生きべきであるか、人間どうしの社会はどうあらねばならないか』ということなどについて、長い間考えて考えぬき、そして『いつでも』『どこでも』『だれにも』当てはまる『普遍の真理』に達せられたのです」（庭野日敬著『法華経の新しい解釈』佼成出版社、p.12）

「『いつでも』『どこでも』『だれにも』当てはまる『普遍の真理』に達せられた」ことを、「阿含経」の経文では、「正覚を得た」と言っています。

(3) 設問

ここでは、「五蘊（色・受・想・行・識）」について次の三つの設問がなされました。

その味（あじわ）いとは何か。

なにがその禍（わざわ）いか。

それから脱出する道はどうであるか。

経文「正覚によりて(1)、(2)」では、「内の六処（眼・耳・鼻・舌・身・意）」について、また「外の六処（色・声・香・味・触・法）」について、同様に三つの設問をしておられます。

自分の心・身・環境に関して、「味い」「禍い」「脱出する道」を求めたのです。

5. 悟り

(1) 経文「味い(1)」

「比丘たちよ、その時、わたしに、このような思いがひらめいたのである」（増谷文雄編訳『阿含経典1』ちくま学芸文庫、p.423）

(2) 悟り

経文「正覚によりて(1)、(2)」では、「そのわたしに、やがて、このような思いが浮かんだのである」となっています。

長い間思索を続け、ついに、正覚に到ったということでありましょう。

6. 味い

(1) 経文「味い(1)」

「かの色（肉体）によって生ずる楽しみや喜び、それが色の味いである」（増谷文雄編訳『阿含経典1』ちくま学芸文庫、p.423）

(2) 味い

「味い」とは、自分の心・身・環境によって生じる楽しみや喜びです。楽しみや喜びを味わっているときは、幸福なときでしょう。

7. 禍い

(1) 経文「味い(1)」

「だが、その色は、無常であり、苦であって、変易（へんえき）するものである。それが色の禍いである」（増谷文雄編訳『阿含経典1』ちくま学芸文庫、p.423）

(2) 禍い

「無常である」とは「常では無い」で、「変化する」ということです。

「苦である」とは、「楽では無い」ということです。「快さは、いつまでも続かない、やがて苦しみが生じる」ということです。

「変易する」とは、「容易に変化する」ということです。

「心・身・環境によって生じる快さ」は、容易に変化して幸福が失われ、苦悩が生じ、不幸を味わうことになるのです。

苦悩が生じ、不幸を味わうことを「禍い」と言っています。

8. 脱出する道

(1) 経文「味い(1)」

「そこで、その色において、欲のむさぼりを去り、欲のむさぼりを断つ。これが色から脱出する道である」（増谷文雄編訳『阿含經典1』ちくま学芸文庫、p.423）

(2) 執着

心・身・環境における快さを味わっていると、この快さをもっと味わいたい、ずっと味わっていたいなどという思いが生じます。これは執着です。

執着は次第に増大し、快さを欲し続けるようになります。これが「欲」です。

(3) 欲

「欲」は、人間が生きていく上に必要なものです。

昔から、生きていく上に必要な欲として、「食欲・性欲・睡眠欲」が上げられています。最近にはこれに「集団欲」が加えられています。「欲」があることは、当たり前のことなのです。

(4) 肥大した欲・歪んだ欲

しかし、欲が必要以上に肥大したり、自分本位に歪んだりすることがあります。これが「欲のむさぼり」です。「渴愛(かつあい)」「貪欲(とんよく)」「煩惱(ぼんのう)」などと言われることもあります。

(5) 欲のむさぼり

① 「欲のむさぼり」は、満足することがありません。ですから、幸せになることができません。

② ものごとが「欲のむさぼり」の通りにならないと、怒りを生じます。

怒りは破壊する心です。物を破壊し、他人を破壊し、人間関係を破壊し、自分を破壊します。こうして、自分の幸せを自分で破壊します。

③ 「欲のむさぼり」がありますと、肥大した欲、歪んだ欲で、ものごとを見たり、考えたり、行ったりします。このため理(すじみち、ことわり、法則)に合わない見かた、考えかた、行いかたをしてしまいます。これを仏教では「無智」「無明(むみょう)」と言います。

無智・無明は「欲のむさぼり」を助長し、幸せへの道を閉ざします。

(6) 三毒

「欲のむさぼり」を「貪欲(とんよく)」、「怒り」を「瞋恚(しんに)」、「無智、無明」を「愚痴(ぐち)」と言います。

「貪欲・瞋恚・愚痴」を、「三毒(さんどく)」と言います。自分を滅ぼす三つの毒です。

人間の迷いの中でも、根本的な迷いと考えられています。

(7) 禍い

経文に、心・身・環境の「味い（快さ）」を味わっていると、やがて「禍い」が生じるとあります。禍いの究極は三毒を持ってしまうことです。

三毒を持つと幸せへの道から逸(そ)れて、愁(なげ)き、悲しみ、苦しみ、憂(うれ)い、悩みにみちた日々をおくることになってしまいます。

(8) 欲のむさぼりから脱出する道

幸せになれない人生から抜け出すためには、「欲のむさぼり」を捨て去り、断ち切るほかありません。

釈迦牟尼世尊は「欲のむさぼりから脱出する道」を説きました。「四つの聖諦」と「八支の聖道」です。これらの教えを実践すれば、欲のむさぼりを捨て去り、断ち切って、苦悩から脱出することができます。

9. 正覚に到達していない

(1) 経文「味い(1)」

「比丘たちよ、わたしは、まだ、この生を構成する五つの要素（五取蘊）について、このように、その味いはこれこれであり、その禍いはこれこれであり、また、それらから脱出する道はこれこれであると、あるがままに知るにいたらなかった間は、比丘たちよ、わたしは、かの天神・悪魔・梵天のすむ世界、あるいは、この沙門・婆羅門、もしくは、人天のすむ世界にあって、最高の正等覚を実現したとは称さなかった」（増谷文雄編訳『阿含経典1』ちくま学芸文庫、p. 424）

(2) 世界

「天神・悪魔・梵天のすむ世界」とは、当時の神話の世界です。

「沙門・婆羅門、人天のすむ世界」とは、生活の場と考えてよいでしょう。

当時の人々には、自分の生活している世界と、想像によって生み出された神話の世界が、ひと続きであったようです。

両方を合わせて、すべての世界ということになります。現代感覚なら、全人類に置き換えることができるでしょう。

(3) 正覚に到達していない

釈迦牟尼世尊は、心・身・環境における「味い、禍い、脱出する道」を、全力を傾けて探し求めました。これが分からない間は、「自分は正覚を得た」とは、誰にも言わなかったとあります。

釈迦牟尼世尊は、「いつでも」「どこでも」「だれにも」当てはまる「普遍の真理」を求めて思索を続けているのです。髪一筋の疑念も無くなり、これこそ普遍の真理だと全身全霊で確信したものでなければ、全人類に向かって公表することはできないのです。

10. 正等覚を確信する

(1) 経文「味い(1)」

「だが、比丘たちよ、わたしは、ついに、この生を構成する五つの要素について、このように、その味はこれこれであり、その禍いはこれこれであり、また、それらから脱出する道はこれこれであると、あるがままに知るにいたった。そこで、比丘たちよ、わたしは、かの天神・悪魔・梵天の世界、あるいは、この沙門・婆羅門、もしくは、人天のすむ世界にあって、最高の正等覚を実現したと称したのである」（増谷文雄編訳『阿含経典1』ちくま学芸文庫、p.424）

(2) 正等覚を得る

① 「心・身・環境における、味い、禍い、脱出する道」を、あるがままに知るにいたったとき、すべての世界の人びとに向かって、「自分は正覚を得た」と公表したとあります。

② 正覚

この経文から「心・身・環境における、味い、禍い、脱出する道を知る」ことが「正覚」であることが分かります。

③ 知る

仏教で「知る」というときは、知識として知るのではなく、智慧として知ることを意味しています。

智慧とは、内容をよく理解して、現実実践し、結果を出すことができる知的かつ行動的な能力です。

11. 解脱

(1) 経文「味い(1)」

「また、わたしには、智慧が生れ、確信が生じた。〈わが心の解脱は不動である。これがわが最後の生であって、もはや迷いの生を繰返すことはないであろう〉と」（増谷文雄編訳『阿含経典1』ちくま学芸文庫、p.424~425）

(2) 解脱

「解脱」とは、「解放される」「脱出する」ということです。

これまでの自分は「欲のむさぼり」に支配されていました。その状態から解放されるのです。

「欲のむさぼり」によって営んでいた「迷いの生活・人生」から脱出するのです。

これからは「欲のむさぼり」のない、「健全な欲」の生活・人生を営むのです。

(3) 最後の生

ここに「最後の生」とありますが、この「生」は、「迷いの生活・人生」のことです。

これまで繰り返してきた「欲のむさぼり」による迷いの生活・人生も、これで終わりとなりました。ふたたび「欲のむさぼり」の生活・人生に戻ることはありません。

(4) 新たな生

経文にはありませんが、ここには「新たな生」の始まりが説かれているとみることができます。

「欲のむさぼり」の人生が終わって、「真の自分を生きる人生」が始まるのです。

「健全な欲」の生活を営みながら、「自分・他人・世間の幸せに貢献する人生」の歩みが始まるのです。